



# 函館

## HAKODATE



大正5年産 ベンキ塗り木造洋館 杉海商店



函館見学の地 保全された 旧函館支庁会



まちづくりワークショップ2003におけるコラボレーション



ベンキ塗りの替え前の町並み



小学生によるベンキ塗り活動



ベンキ塗りの替え後の町並み  
(中央の建物は市立函館市立中央小学校)

### ペンキ塗りボランティア活動による町並み改善 函館の市民の手によるまちづくり



1984年 活動初年 北大生と市民のペンキ塗り活動

北海道で一番古い都市のひとつである函館・函館だが、都市としての姿を醸成するのは18世紀末、今から百数十年の昔に過ぎない。しかし安政年間(伊豆下田とともに幕府の開港場となった箱館は、北海道開拓の政治的経済的な基地として、また北洋漁業の中心地として、もたらす経済によつてまさに光り輝く都市となった。

異国への窓口としてアメリカ、ヨーロッパそしてロシアの文化と技術が流入し、明治期には豪壮な洋風木造や煉瓦造の建築物、大正期には日本最初の鉄筋コンクリートのビル群、木造の和洋折衷の民家などが建てられ独特のまちなみ景観を形成し、文明の十字路、混血の美女ともうたわれた。

そんな建築物のひとつ旧函館支庁会(札幌北海道開拓村への移転)の移転反対を理由として始まった歴史的風土を守る市民運動は、支庁会(のほほ)現地保全の実現をはじめとして、行政や民間をも動かして多くの歴史的建造物の保全や再生を果たすこととなった。

ここに紹介する若者たちは中心とする活動もこれらのまちづくり活動の系譜をたたくましく引き継いでいる。

港町・函館の函館山麓一帯に広がる西部地区は、戦前期の洋風の建物が数多く残り、独特の町並みを形成している。建物の外壁には下見板が張り、ペンキ塗りのカラフルな配色で仕上げられている。建物のメンテナンスは、五年から十年の周期で定期的にペンキを塗り替えることが必要だが、経済の衰退や人口の高齢化などによつてそれがままならず、ペンキの剥がれたものが見られるようになってきた。このように老朽化が進む建物とその所有者を元気づけ、町並みを改善するべく、市民ボランティアによるペンキ塗り活動を始めたのは一九九〇年のことである。



日本の道庁議 教会が見える元町 大正頃

をおこなった。これはその後、二十代の若手アーティストによる作品制作と展示会の開催として、さらには西部地区の町並み・住環境の再生をめざす、まちづくりワークショップの会場として利用されることとなった。

建物所有者はほとんど高齢者、その後継者のトタンのペンキを塗り替えたり、一部の壁面の下見板を張り替えたりするなど、自主的に建物修理、改善をおこなっている例も少くない。

ボランティアのペンキ塗り手は、当初は色彩研究を担っていた市民グループと札幌の北大勢が主力であったが、その後地方の函館工業高校、函館高専、

教育大学の学生、一般市民らが多数参加し常態となった。市民が直接手を下す町並み改善、まちづくり活動として定着しつつあるといえる。

新治43年産 函館区公会堂 文化庁の指定で修復 建設当初の鮮やかな色で彩った



1階は和風 2階は洋風ペンキ塗り 典型的な函館の民家

北海道大(工学部) 工学部建築学科 住環境計画研究室 森下 満

